

# 二学期の抱負とその展開

—集団のなかでの

ひとりひとりを大切に—

岡田 鈴代

(一) はじめに

自然にめぐまれていない中心地の幼児たちは、夏休みの間、どのようにしてすごしたかしらと思います。いろいろの生活経験を話し合いますうちに、びちびちと楽しくすごした経験発表を聞くことができますとともに黒々とした顔を見ることができましたので、うれしくなりました。

休み前の父兄懇談会に、休み中の計画の一つに海や山、また、田舎などのプランもよろしいが、日常の平凡な生活のなかにも、アイデアをいかした夏らしいあそび、また、この時期に味わってほしいことを心がけてほしいのですと、お願いしたのでした。

例えば、水あそびを水着にきかえさせてあそばせたり、夜空の星を家族みんなで眺めながら話し合ったり合唱をしてみたり、お兄さんや、お姉さんの採集の手伝いをしたりなど、ひとりひとりの家庭でできる範囲内で十分楽しめると思います。

それにしても、ある面では、一学期当初にもどった幼児がみられたことも確かなことです。しかし一日も早く生活のリズムを、ルールにのせるべく努力もしなければと思いません。そして、この機会に、グループを大きく広げるとともに、みんなが協同であそぶためには、ルールの必要を感じさせて、ひとりで何かをするより、お友だちと一しょにした方が、いろいろの面で楽しいといった経験をさせたいと願いながら、それぞれの幼児に情動的な安定をさせたいと思います。

(二) 二学期における展望

ともすると、私はつい二学期こそといった気持だけが高度な教育計画にはしり、幼児が思うように活動してくれないと、いらいらしたりする危険がないだろうか、毎年反省するのです。それには、一年保育の弱みが幼児の活動に支障をおこしているのではないかと

思いますとともに、教師としてのあせりだけが頭をもたげてきま  
す。常に、まわり道をしながら幼児の芽生えを育てていくのだと  
心にきめていまして、一学期で果たせなかつた面を、二学期で  
満たしてやろうと、ハッスルする傾向がないでもないのです。

それにしても、現実の段階では、目前にいる幼児らに合った計  
画以外価値がないと思いますので、計画通りレールの上で活動さ  
せるなどといったことは考えていません。

幼児は、明日から、どんな活動を展開していくか未知なわけ  
ですから、どんな場面に直面しても、さっと支えてやれる包容力が  
必要だと、いつも自分にいいきかせております。それとともに、  
幼児が表現するあそびの内容と、ひとりひとりのあそびの關係に  
ついて注意深く目を向けることが大切ではないでしょうか。いま  
までは、ごっこ遊びにしても、空想の場面や即席の材料でまにあ  
っていたものまで、あそびの内容によっては、部屋の片隅によせ  
たまま使用しないこともあります。

園内にある物的環境は、全部知っているわけですから、自分た  
ちが遊びに必要な感じますと、あちこちから持ちより組み合わせ  
て創作します。何とか、自分たちの力で創作することができるわ  
けです。ですから、そのような時にも必要な条件がすぐ整えてや  
れるように配慮できればと思っております。

このように、創作活動が自然に遊びのなかに多く入りこんでく  
るとともに、グループ間との交流や役割もおのずから活発に動き

だしてくることが予想されるのです。そこで私は、幼児らの活動  
の発展をおいながら、すべての場面におこる、いろいろの問題点  
に対して、どのように助言すべきかくふうしなければならぬと思  
っております。

### (三) 展 開

二学期になって、一、二週間ほどたちますと園生活は軌道にの  
りだします。すると、夏休みで、幼児らの成長したことにまず驚  
きます。それに体力ができた点、敏しょう性を要するゲームあそ  
びにたくさん参加します。そして、いくども活発にくり返しあそ  
んだ後、しつとりと汗ばんだ身体を木蔭で涼しさを求めている姿  
がみられたりします。

しかし、二学期もなけば頃より、共通の目標をもって活動をす  
ることが可能になってくるのでしょうか、いろいろな問題点にぶ  
つかります。それらの時に、よくみられる幼児のひとりひとりの  
創意や思いつきを、友だちの間で十分發揮できるように配慮した  
いのです。そして、真に豊かな集団的な活動が拡大していきます  
ように注意してやりたいと、せつに思うのです。

しかし、現実には、その場その場に直面すると、幼児の理解に  
たつて、肯定的な指示ができずに幼児たちに申しわけなく思うこ  
とがたびたびあります。

それでは、私のつたない実践とともに解決できた面、また、問

題点となつて、日々苦しんだ面の例をあげてみたいと思います。

(1) 共通の経験をもとに、創作表現を広めるなかで

ようやく暑さもやわらぎ、しのぎよく過ごせるようになりまして、自然幼児らは、周囲の環境に敏感に反応してきます。ちょうど、この当地で盛大に行なわれます秋祭りには（九月二十六、七日）、中心地だけに各家庭でいろいろ祭りについての話題がでるのです。園もその日はすこし早いめの降園で、幼児らは、勇み足で、ごちそうのまわっている家庭、練りや山車のでる町へと降園するのです。そんな町全体の雰囲気は幼児らは肌で感じてか、少々落ち着かない面もありますが、うれしいことがいっぱいといったようすがみられます。

そして、そのような雰囲気は反映させて、山車が園内を練りあくるのです。

幼児らが目の前でみた大きな鯨船や、お入道を、自分たちも一度引っぱってみたい。こんな気持ちの高まりが、すぐ創作意欲に発展したのでしょうか、無口な幼児も、消極的な幼児も、それぞれ自分のできる範囲で（鈴を通してたり、箱に模様を描いたり）活躍しているのです。昨日みたような、でっかくてのれる船をつくるんだといった、ガンバリの力がでてくるのです。まず、遊具の箱車の上にボール箱の大きいのをのせて、釘を打ちつけて固定させ、紐に鈴を通して両側にいくつもさがるように結びます。早く

引っぱってみたいので、一つ作業ができますと、まず園内を回り、ひっぱって喜んでいきます。

太鼓をたたく幼児、ひっぱる、のるなどしばらくは満足感に浸っておりますが、さらにより本物に近づけるため、もっとぴかぴかした船にしようといひだしたりします。

私は、すこしでも幼児らの期待にそうようと、金銀紙や小箱、細い竹などを用意しました。すると今までのよりキラビヤカーな船をつくります。（金紙を貼り、チリハライを上下反対にして船先に立ててみるなどアイデアを考えます）そして、ひとまわりのつたらかなにのる人は交代することを自分たちで決めて、お祭り気分を味わっているのです。いたんだりしますと、その都度修理したり、いくらか改良したりしながらあそんでいるなど、興味の持続がみられました。動く鯨船を自分たちでつくり出した喜びと、感動の再現によって、あそびに楽しさが加わり、次々と製作意欲が上昇した面がみられました。このように、まったくの偶発的に行なわれた活動のなかでほとんどの幼児と教師が一体になって協力できた喜びが、いつまでもほのぼのと残っているのです。はっきりした目的をもつ幼児、また何らかの目的を意識して活動した面を今後のあそびの中においても大切にしてやりたいと思ひました。

(2) グループのなかで、ひとりひとりの行動を大切に

育てていくなかで

## (1) H児とグループの関係について

運動会の材料を使って売店ごっこに興味をわいた時のこと、運動会に使用した花のアーチ(高さ、二m五〇、幅、三m)をままごとコーナーの入口にでもと部屋のなかにおいておきました。すると、これを見つけた幼児たちは、お部屋の窓口に利用し、アーチの内側に机を並べて、「うちら、お菓子やさんさ」と女兒の間ではじまりました。綿菓子と違ってビニール袋につめて窓口に並べますと、二日ぐらい売りがかいました。だが店屋の主人が三日目に男児Hになり、「この店な、駅にある店さ」といって交代しました。そこで、いままであそんでいた女兒がどのような感情をもっているかと思つて、「あなたたちも、お店ほしいのでしょ」と聞きますと、「もういいの、したくないの」といって別のあそびに移行していきました。そのようすもあまり続けてあそびたいようでもなかったのです。H児にそのまま、「こんどは、どんなお店かしら」といって、ようすをみていました。すると、H児の日頃仲よし友だちが、せつせと店の品物をおきかえているのです。それに、参加者が男児ばかりで品物も、本や駅弁当といったものです。サンドイッチといつて、ボール紙をパンの大きさに切り、間に牛乳のふたや、セロハンの端紙を入れてゴムでとめたのを折箱に詰合わせたものでもできましたが、程度としては、たいしたことのない内容ですが、このH児らなりに一生懸命なのです。

Hは日頃、体力的なあそびを得意とする幼児で、あまり室内で活

動していることがすくない方なのに、どうしてか、この店が気に入ったらしく、盛んに並べ、終わると、「はよ、かいにきて」と買手を求めますが、客はすくなく、一人二人で、とくに女兒らには、腕白でいたずらのH児におそれているようで、不思議そうにみていて、よつてこないのです。

私はこのようすから、完全にこのH児は疎遠されている気配を感じ、この幼児らのためにも、H児たちにも、自分たちで仲よくあそべるにはどうすればよいか、会得させるべきチャンスだと思ひまして、どうしても他の友だちとも交流せざるを得ないように、「このお店折角できても、お部屋のなかでは狭いから、お庭に移して下さらない」と頼みました。

「うん」といって、軽々と力のある男児は園庭に移して開店してくれました。そこで私は、汽車ごっこつながりをもってあそばないかしらと思ひ、みんなのよくみえる場所へ石灰のはいたライン引きをおきました。

すると、Yがみつけ園庭に白線をくねらせて描きはじめました。一本、二本と並べて引くところは、運動会のライン引きとはちがひ、自ら線路のつもりだったので、私は内心うれしくなりYの後ろについて、「この線、長いのね、どこまで続かしら」といいながらはしりました。それに注目した幼児らは、早速縄電車をもち出しはしりはじめました。

すると、急に外が活気づいてきます。参加人員も徐々に多くな

り、売店では、サンドイッチ、お茶、ジュースといういろいろ買求める姿がみられ、自然おそれていた女兒たちも仲間入りをして楽しんでいのです。しかしこんなに自然に交流したかみえても二日ぐらいあそびましたが、その内容に深まりがみられず、私には物たりなく思えてくるのです。

なぜ交流したかみえたH児が気になるのか考えてみました。お店を他の友だちに交代できずがんばっている点、また、自分の仲よし以外の幼児からは問題にされない存在にある点がみられました。そこでHグループのひとりひとりと、他のグループのひとりひとりの個性を伸ばしつつ、幼児対幼児のふれ合いをもっといろいろの場面で深めさせたいと思ひまして、幼児対教師、幼児対幼児の話し合いをあそびに参加した者全部でしました。

集団のあそびを楽しくするには、自分自身をコントロールしていけるようになればよいと思ひますが、それまでの間、つまりお互いの意見や自我がぶつかり合うこの段階で、どう対処すればよいのでしょうか、とにかく遊んだことの話し合いをもちました。すると、「H君たちも、電車になったりするの」「お店やさんもかわりっこしたらいいやんか」など。

また、電車になった方の役割についても、話しができました。「折角ジャンケンで決めたのに早くかわるの」「そうなん、それでおもしろくないの」とか、「今日は、ぼく全然切符切りにならなかったもん」など、満足感が味わえずに終わった幼児の間から

は、懸命な意見ができました。

ところで問題のHはあまり話もせず、「かわつたらええやろ」といっただけです。しかし、みんなの話し合いを聞いていこうちに、なにか納得した面がうかがえましたのでいくらか安心しました。それから二日ぐらい。一応汽車ごっこが發展したかのようにみられましたが、決めた役割の順番が後になった幼児は、まちきれずに、他のあそびに移行していき、日がたつにつれて、客の数が少なくなっていくなど、その辺のタイミングを合やすのは幼児らにはむずかしく、あまりにも多くぶつかる問題に対して、教師自身もいささか、スランプ状態に入りそうになりました。

しかし、気になっていたH児は、ルール違反をすると、他の友だちとおおせいで注意されるので、以前のようななずるさとか、腕力はいくらか、かげをひそめたように思われました。

ひとりひとりが協同であそぶには、ルールを決め、それを理解しなければ、お友だちの仲間に入れてもらえないということを幼児なりに感じとったと思われました。

また、その反面、幼児間でいくつもの役割あそびを展開すること事態むずかしいのではないかしらと思ひました。それで、役割分化に無理が生じないように思ひまして、それ以上のことは望みませんでした。

(口) ロボットつくりから劇あそびに發展したK児について

ロボットつくりから劇あそびに發展した時のこと、中、大型箱2

個を利用して、自分が上からかぶれるロボットをクラスで人気者のK児ら三人が、(この三人組は、いつも創作力にすぐれていて、何かと創り出す時の顔は、素晴らしい童顔に接します。特にK児の、のびのびとした明るい性格から生まれ出す作品からは、ダイナミックな面がみられました) 考察しました。

そこで、完成したロボットを頭からかぶり、腕をだし、目をだして、ゆうゆうとあるくようすはおもしろく、他の幼児の注目のまどになりました。「先生、K君みたいなロボットかして」教師「そうね、きいてごらん、先生もかぶりたいけどK君はかぶりがくて一生懸命につくったのだから、今すぐかりるのちよつと悪いわ」といいますと、「よし、僕もつくろう」といった意欲のでてくる幼児も現われて、一応それらしく、口や目を切り抜きますが、ちよつとしたくふうによってできばえに差がみられますので、やはりK児たちのロボットの方が人氣がよいのです。

これをチャンスにして、今まであまり経験したことのない劇あそびに発展させてみようと思いました。

ちよつと、十二月でもあり、部屋にはツリーなどの飾りつけもでき、心算しく、クリスマスを待ちあこがれている雰囲気も手伝ってか、それとも、K児の家庭が大きな製パン工場で、クリスマスの日には、園にも、このK児宅から、ケーキが届くことになっていますので、時々、友だちに、「僕の家から、おいしいケーキを、つくってきたでな」ともらしていたのが原因になったので

しょうか、T子たちから「Kくん、早くケーキつくってきて」とせがまれていました。この機会に子どもたちの気持をロボットで十分に表現させてやりたいと思い、ロボットと楽しくあそんでいる時のようすを、そのままとめてみました。

あらずじは、ロボットロボチャンは、どんなケーキでも注文通りの品物を焼きます。

その注文に来るのは、森の動物たち(こりす、きつね、こぐま、さるなど好きな動物になるのです)。ロボチャンの家の中には、ツリーが飾られました。

「こちらは、おいしいケーキや、パンをつくるお店ですよ。さあ、どなたでもいらっしやい」からはじまります。その時、

「ロボットロボチャン、今日は、おいしいケーキを下さいな」と自分で即興的にふしをつけて、次々と動物たちが注文にきます。

「あのね、ぼくはクリーム台にして」とか「たくさんミルク入れてよ」とか、注文に来た動物がいろいろ好きな形を注文しますと、ロボット組は「はいはい、明日のクリスマスまでに、やいておきます」

そこで、歌をうたいながら焼く表現をします。歌「ロボットロボチャン、エブロンつけて、さあ、さあ、さあ、ケーキをやきましょう。たまごにミルク、かきませて、おいしくおいしくやきましょう」(小林恵子作詞中村太郎作曲の「森のクリスマス」の歌を参考にさせていただき、すこし、アレンジしました)

この歌を、二、三回歌いながら、ケーキを焼く表現をします。

ここで、ロボットの表現ですから、大変ぎこちなくおもしろいので、一同は大笑いをするのです。おいしそうな匂いをかぎつけて、動物たちは大喜びで、「ぼくたちも手伝ってあげましょう」といって、動物も一しょになって、もう一度、うたいながらケーキを焼く表現をします。大きい箱ケーキを中央に並べ、ロボット

「さあ、こんなに大きいのが焼きましたよ」動物たち、「うれしい、うれしい、ロボットロボチャンは、じょうずですな」といいながら、焼けたケーキを大きな皿に並べ、ケーキにサンタの顔をしたローソク（父兄からいただいた物）を立てて、ナイフの用意をする。ここで、ローソクが大きいので安全だろうと思

い、私は火をつけてやります。そして、みんなでメリークリスマスの歌をうたってケーキにナイフを入れ、みんなでいただく表現をして終ります。

以上は概略で、参加人員は十人です。ナレーションや情景、それに会話は、参加者によって、いくらか変化しますが、こんな劇あそびには、形の制限がない上に、自ら選んでする経験や活動がうまくなるといった程度でのびのびと参加できるのが強みです。

二期も後半に近づきますと、誰々は、創り出すことが得意だからと、その幼児を仲間のなかで認めあったりして、お友だち関係が安定してくるのではないのでしょうか。腕力を用いるような喧

嘩などほとんどみかけなくなります。また、お友だちの感情をうまく受けとめることとうまい幼児ができて活動しだすと、他の幼児たちも仲間に入り笑いがとび出します。

このようにあそびの主になる幼児によって、感情が豊かになり、あそびの内容が深まる場合もあるのだと思います。

#### (四) おわりに

二期らしきといったイメージが強く頭をかすめると、どんな場面に直面しても、これでいいのかしら、もっと遊びの内容が豊かに充実しないかしらと考えさせられます。

でも、幼児たちのひとりひとりの発達ということから考えてみますと、二期らしいという、みかけ程度の高そうな経験や活動をおってみても、意味がないのではないのでしょうか、すなわち、集団的な行動の多くなる二期においても、やはり、ひとりひとりの幼児の行動や感情を大切にすなわち、幼児の社会的な行動をのばしてやりたいと思います。

そしてそのような経験を通して、幼児と幼児との集団というなかでの相互のふれあいをより深く豊かに育てていきたいと思

います。  
三期においても、やはり、あせらずに足もとをみつめ、幼児を大切にしながら豊かな経験を通して、幼児の発達を十分にさせてやりたいと思います。

(四日市々々立中部幼稚園)